

# 錦帶橋史

岳淵 永田新之允 著

## 第一章 関ヶ原役後吉川広家の奮勃精神

### 一、天下分け目の大会戦と毛利一族

足利十三代の末世は尾大振わす幕府の権勢地に墜ちて、諸国の豪族は其の命に従わず天下は麻の如く乱れて天龜・天正の戦国時代となつた、近代不世出の偉材織田信長は臣下明智光秀のために襲われて四十九歳を一期に本能寺に殞れ、世は羽柴秀吉の豊臣氏に代つた、秀吉の天壽甚裕かならず六十二歳を以て此世を去らんとするや、遺孤秀頼を数人の幕將に托して瞑目したが、其の埋骨の土の乾かぬ内に早くも二大勢力の分裂を生じ、遂に豊臣・徳川の争端は開かれ、豊臣方は智略に長けた石田三成を中心に徳川家康に当り、徳川は深謀を蓄えて勢い豊臣一派の掃蕩に着手した、其れが遂に関ヶ原の大会戦となつて、豊臣方は一敗地に塗れ、中心人物の石田三成や安国寺惠瓊は京の七条河原で斬首せられ、大勝の徳川方は搖ぎもなき徳川幕府三百年の天下を創統するに至つた。

此の間に於けるわが防長の毛利一家の進退、殊に毛利の親藩であり当時の毛利当主輝元とは、従兄弟の開柄なる吉川広家の進退に關しては注目を怠つてはならない。抑も智略の石田三成は徳川家康が豊臣家に対し油断のならぬ曲者であるを



予ねてから察知し、其の曲者を除くために自己の味方を造ることに拔目はなかつた、其の味方の中に中国の大藩たる毛利元就の孫輝元を逸することなかりしは勿論である、然れども吉川広家は天下又大いに乱れんとするを察知して、此の場合にはわが毛利一家は二大勢力の何れに投ずるを利とすべきかについて、万遺算なきを期していた、元来毛利の一黨は豊臣の幕下として其の頤指に従い、朝鮮の役にも殊勲を建てたのだから豊臣方たるは当然たる觀はあるが、而も譜代の郎黨でないばかりか、信長が九州統一戦に乗出して京都本能寺に宿陣した其の頃まで——つい幾年にもならぬ前までは、九州征討の進路の邪魔物である中国の毛利勢を掃蕩するために、豊臣秀吉は信長の命を奉じて播州姫路を本營とし備前、備中、因幡方面に布陣する強敵の毛利を討伐しつつあつたのであるから、毛利吉川に取りては豊臣を敵として戦つた血痕は猶ほ鮮やかなものがある、其れが本能寺の事變を契機として豊臣毛利の講和が一瞬にして成立し、秀吉は後顧の憂なく明智の謀叛を膺懲して難なく之を平げ得たのであるから、寧ろ毛利としては秀吉に恩を与えても自ら多くの恩顧を蒙つたことは無いと言つてよい。

戦国乱麻の世は優勝劣敗、各將僚とも自己の保存を計るの外余念なきは又当然であらう、一介の武弁であるが一個堂々たる政治家の素質を有する吉川広家は、此の間に処して等閑なる能はざるは蓋し又当然と言わねばならぬ。

彼れは徳川家康に着眼し且つ嚮望していた、石田三成は智略縦横の材を抱くと雖も、天下を制する程の人物でないといふことを觀破していた、豪雄秀吉の亡き後の天下は家康に歸すべきを洞見した彼れは、其の親友黒田長政と相通じて家康との間に連絡を保つことを遺れなかつた、長政は家康と刎頸の交りを重ね其の幕僚として進退を共にした快漢であるからだ、広家——長政——家康の相互關係は、表面には表われぬが脈々として機動したことは、後の関ヶ原大会戦の其の日に如実に立証せらるるのである。



毛利輝元は広家ほどの智謀と深慮は無い、言わば善良にして素朴なる武將たるに過ぎない、家康が米沢藩主上杉の鎮圧の為に東国に軍旅を發するや——此の一役は三成が家康を中央から驅り出して其の虚に乗じ家康征伐の旗を揚げる策謀であるが——三成は急使を毛利の居城広島に發して輝元の上阪を促した、輝元は前後の分別もなく急ぎ船を發して大阪の豊臣本丸に乗込んだ、一方雲州富田城に在る吉川広家は、此の如き事もあるやと頭を悶めかして是れも急使を馳せて、若し大阪から招請があつても此の場合其れに応ぜぬよう自重あらんことをと言わしめたが、此の時已に遅し、輝元出發の後であつたので間に合わなかつた、此の僅々二日の差が山陰山陽八ヶ国を領した毛利の潰滅を招いた禍因となつたことは是非もない。

## 一、吉川広家の苦心と大望

輝元が大阪に乗込んで豊臣方の盟主となり之を牛耳る位置におかれたのは、全く石田三成の計略に陥つたのであるから、広家は是より非常な苦境に立ち、腸九廻の思いもあるも及ばぬが、何等かの活路を求むるに智腦を絞らねばならぬ、其れが則ち「密使」となつて家臣藤岡市藏と服部治兵衛の兩人を竊に家康軍へ送ることになつた。其の密使は広家の書面を以て東海道を下るのであるが、風態を下賤の者に扮し、書面は幾つにも切つて菅笠の紐の中に封じ込み、或は草鞋の紐又は着物の襟中に隠しなどして、忍びの身を寄せたのが遠州浜松、丁度其の時、家康は下野の小山駅で大阪方拳兵の飛報を受け軍を班して浜松へ到着したのであつた。書面は黒田長政を介して家康の内見に呈せられた。其の文意を要約すると、輝元は不意を喰つて大阪方へ馳参じて居りますが、元と其れは本意でありませぬ、毛利勢は関ヶ原付近で東軍を待つて居る大阪方の右翼南宮山に配置せられるが、東軍に対し一発も射たぬことにしてあるから其の前は安心して通過されたい。夢疑いあるべからずとの内応の飛報である。家康は喜んだが思慮深き彼れは尙用心の為に其の左翼に屈強な軍隊を配置し



て、毛利軍背反の万一に備え、大垣を陥れた後全軍堂々と関ヶ原へ迫つて来た。此の朝は霧深く大阪方の展望を妨げたが、発火一たび轟くや天下分け目の戦争は始められ、今や血戦は酣めとなつても大阪方の右翼毛利軍は南宮山から一発も打たぬので、大阪方の本営では気が気でない大騒ぎをしている其の内に、東軍の突撃は無難に南宮山前を通過して大阪方の中堅を衝いて主力を盡したから、大阪方は作戦に大違算を来し忽ち総崩れとなつて潰滅してしまつた。石田三成等は護衛もなく山間の一茅舎に免れ隠れているところを捕えられて大阪方の全敗、家康方の全勝となり、天下は挙げて徳川の物となつたのである。

此の一戦は徳川に取りても豊臣に取りても勝敗榮辱の大賭場であつた。其れが毛利軍の嚮背に依りて成敗処を異にしたとすれば、敢えて悉く毛利の嚮背のみにより徳川の天下が定つたと言わざるまでも、而もその主たる要素となつたことは争われない事実である。随つて家康は戦後の論功行賞に於て毛利に対し大いに賞功あるべきであるのに、其処が冷厳にして意思の鞏固なる家康である、彼れは輝元が自分と予て兄弟の誼に等しき交親の誓書を交換しながら、大阪方に与みし而も其盟主となつた事を怒りて毛利の旧領地全部没収し一浪人に放逐すると言ひ出した。輝元は此く言われても一言の異論も言われまいが独り腹の虫の収まらぬのは吉川広家である。彼れは黒田長政を通じて家康に哀訴嘆願の意を盡し毛利家の救解に努めた、然るに家康は鋼鉄の意志を以て断乎として聴入れない。広家こそは誠意を認めるによりて防長二ヶ国を与えるが輝元には一坪の土地も与えることはできぬと固く執つて動かない、更に回を重ねて黒田を通じ、宗家毛利を滅ぼして自分が防長二国を領するわけにはゆきませぬ、私は一介の浪人になつて宜しいから毛利だけは御助け下さいという広家の衷情が遂に家康を動かし、意稍々解けて、其れでは吉川の表忠に面じて輝元に防長二ヶ国を与える。広家は岩国に六万石を封ずるということになつて、雲州富田城主十一万石の吉川氏は五万石の減封を忍んで慶長五年の戦役の歳に岩国へ入



封することになつた。是れ実に広家の慘憺たる血涙史である。此の場合徳川に向つて争つてみたところが、恰も磐石に向つて一鶏卵を投ずるが如し、自ら碎けて止むのみである。深謀遠慮ある広家の其の鬱勃たる精神は無念であるけれども、此処が人間一生の一大時と考へて恭しく家康の下知に黙従したのである。併し乍ら広家は永久に死んだのではない。一時に屈して千載に伸びる大志を抱いて、辺疆岩国に一先ず落ちついた。彼れの鬱勃たる精神は果して何を眺めているのだろうか。

此の鬱憤は独り岩国藩上下の心底のみでない。萩の本藩にては毎年正月元旦に「廊下の式」というものが行われていた。其れは歴代の毛利藩主は其の日の朝、表御殿に於て家臣の祝賀を受けて後、藩主が奥へ入ろうとして奥御殿に通ずる渡り廊下まで来ると、急に足を止めて人待顔に佇立する。其処へ上席の家老が急ぎ足に駈付けて平伏し「殿様、今年は徳川征伐は如何いたしましたようか」と恐る恐る伺いを立てる。殿様は徐ろに顧みて「うむ、まだ早からうぞ」と、何気なく言いすてて其のまま奥へ入つてしまふ。一見他愛もない君臣の所作事であるが、其れが毎年元旦の朝礼の重な儀式として行われ、輝元より十四代目の敬親の世にまで伝えられ、而も其の頃は天下多事にして形勢將に大に変化せんとする際でもあるが、敬親が江戸から帰藩しての正月の事、家臣が廊下の式に於て例に依つて伺を拜すると、敬親の答が趣を異にしてゐる「うむ、考へて置くぞ」と、意味ありげに奥へ入つて行つたので、家臣は大に驚き且つ意を強くしたといふことである。関ヶ原屈服以来の報復の宿志が今や達せられる時は到れり、尊皇倒幕の錦の御旗の揚げらるる其の一步手前の、旭かがやく廊下に於てであつた。

『さて話は前に戻る。

慶長八年二月、徳川家康に征夷大將軍に補すとの朝命が降り、四月には秀吉の遺孤秀頼は内大臣となり、七月には家康



の孫女千姫せんひめが秀頼に嫁する等、徳川と豊臣との調和策も拔目なく取られたけれども、両軍閥の根底には火が燃えているから、家康は自然と豊臣閥に向つて威圧を加えることになる。段々其れが嵩じて遂に慶長十九年十一月の大阪冬の役が勃発し、両閥戦端を開いたが固より徳川に抗する力は豊臣にない。講和は成立つて小康を保つたが又も翌元和元年三月に大阪は再挙して五月の所謂夏の陣役に於て豊臣氏は遂に滅亡してしまつた。是よりして徳川の威勢は天下を圧し何者も弓を引くものなきと同時に、旧豊臣の遺將僚及び其の郎党らは散落して或は農に歸し商と化し又は一劍以て天下を放浪する劍客となり、或は又海外に出でて朝鮮支那沿岸を劫掠する海寇の徒と姿を変えたものも居るが、主を失した失業の輩は国内に蟄伏して脾肉を撫し風雲の動くを待つ者も亦多かつたのである、吉川広家は之を睨んでいた、俗に「売家と唐様で書く三代目」という川柳もあるように、過去の和漢の故実を見ても、初代は創業の英雄、二代は守成の大器であるが、三代目となると凡庸の君主が現われ勝の世の中、徳川も慶長十年には二代秀忠の世となつてゐるけれども、其の後繼者の生い立ち如何が注目すべきであると、岩国から遙に江戸の政情を眺めていたのである。茲に於てか彼れは軍略的に用意を怠らず、先ず金穀を蓄えて非常時に備えた、即ち「産米増産計画」である、其の鬱勃精神が形を変えて表現したのが麻里布、装束川下、尾津、和木方面に亘つて年次を逐い施された海面干拓と、南北河内、玖珂、祖生、伊陸、日積、柳井方面の山谷開墾の大事業である。

### 三、劇的光景の鞭棄小路

これは實に軍略的ばかりでない、十一万石の領主から六万石に減封された広家には出雲から隨伴した家臣が卒族に至るまで相当数多くいた、五万石を減ぜられた身代としては、是れらの臣属を養うに石米を増産せねばならぬ経済的理由も大にあるのである、かたがた両方面からして之に第一に力を注いだ、王政一新の直前に岩国藩の産米額は実収十七万石と称



せられたのも此の恵沢に因るのである。此くて兵糧の準備は着々進むと共に、口糧の節約を統制的に実行し所謂食い延し策のために、日に少くとも一度は、上は殿様より、下は百姓町人に至るまで「茶粥」を食することが、法令を以て命ぜられた。岩国茶粥は人民任意のものでなく保有米を豊かにするための藩律として達示されたことが後の世の習風となつたのである。

今一つは勤儉令を普ねく厲行すると共に「参観交代」を拜辭したことである。参観交代は徳川幕府が地方の大名小名を制御の政策で彼等をして金穀を貯えしむると、其れが叛乱を誘發する資源になるので、各藩をして其れを消費する機会を多からしむる目的の下に立てられた制度である。地方の藩主が何年目かに交る交る遠路を行陣を作つて江戸へ上ると、多人数の隨員を召連れて長途の旅であるから相当の経費が入用である。藩庫は金穀を蓄うるに違がない。幕府の政策の巧妙なる家康の遺計であると伝えられている。而も岩国侯は、毛利の支藩であるという理由で之を辭し甘んじて陪臣格となつたから、家康とは特に近密な関係はあつても江戸へ上る煩累を避け得たために藩の財政を喫消する負担を免れた。是は単に儉約というばかりでなく、軍略的準備の素心に因ること多しと私は観ている。

其れらと共に広家に取りて尤も大事な一件は、第三代將軍の器量を見るまでは長生きせねばならぬことである。故に広家は其の寿命を可及的延長するが為に撰養に意を用い、毎日城外に出て乗馬、射技等の自己鍛鍊を忽にせず之を目課としていた。或る日の事、日將に暮れんとするので同行の侍臣を隨えて帰館せんとして肥馬に乗り悠々と横山の御館へ脚を運んでいると、路上に邂逅した江戸からの帰着の使者、其れは江戸に在る隱密（情報部）からの密書を携え帰りたる使者が、馬前に跪いて一書を呈するのを受取つた。広家は駒を停めて何気なく其れを受け披いて見る。従臣は馬の前後より殿の顔色を窺つていると、広家の面は見る見る内に惛然たる憂いの色が漲つた。眉は曇り唇は固く凝つて如何にも失望落膽



の容子である。従臣の顔にも不審の色が漂う。広家の唇からは歎息の青い呼吸さえ長く漏れた。繰返し読み来り読み去る巻紙の書面は長く垂れて馬腹に及び、勢いなく夕風に翻える「三代將軍たるべき家光公は英明の主にて候」という書面の一条が痛く広家の胸を打った。英明の主であつてみれば売家と唐様で書かない天下だ。徳川の天下は揺ぎもない大磐石だ。其れでは泰平の天下乗すべき隙もあり得ない。ああ吾が計已んぬ、万事がダメとなつた。広家の胸には此の衝激がむらむらと捲き立つて全身の血を奪い去つたのである。一時虚脱状態に陥つた彼れは喟然として長大息し、遙かに東の方江戸の空を眺めて無言のまま長い目を瞑つた。石像のような其の手から、やがては馬上万軍を指麾すべかりし竹の鞭が、しず心なくパタリと地上に墜たり落ちた。馬前に伺候したる老臣の白い眉の下からは殿の心を思いやる涙が雨の如く流れる。馬後に蹲うづまる壯士の筋張つた両の腕には、無念やるかたなき悲憤の拳が大地を打つて、暫くの間主従の沈黙は続く、其の悲劇の場所は横山の岩国高等学校校門の前、世に云う「鞭棄小路」が其れである。

鞭を棄てたままの広家は、手綱を執る手にも力なく徐々と御館に帰りゆく、毛利一家の再興を多年の望みとして胸中の経綸を画いた其の万策は、すべて失望の闇に葬られ、夢にもあらず現にもあらざる沈鬱の心を懷いて、日影の薄い夕陽を背に負いつつ城門深く消えて行く。

是より先広家は、内に在つては其の實力を養うと共に、外に在つては江戸に情報部（隠密）を置いて政情の牒知を怠らなかつた、政治家である彼れが風雲際会に備うる用意の周到なる以て想見すべきである。而も今や其の鬱勃たる精神、回天の覇図は、英明なる三代將軍の世を嗣ぐを知るに於て、其の事既に広家自身の寿命が許さない、広家其の時は齡六十に近いのである、百歳を保てば格別、其れは到底望めないことだ、是は其の後の状態に徴しても明かで、秀忠の在位十八年に次で三代將軍家光の在位二十九年の長きに亘り、文恬武熙、徳川封建の機構はいよいよ鞏固で法令嚴明、家康の遺策の



大成を招来し、往々不平の徒、謀叛を計ることあるも磐石の大基根に微動をも及ぼさず、家光死去の慶安四年には山井雪の乱ありと雖も忽ち処分されたるが如き以て其の一証左とするに足る、鞭棄小路の細徑に鞭を棄てたる吉川広家は、天下の大道からも遂に鞭を棄て元和二年歳五十六にして早くも封位を広正に譲つて、元和九年歳六十三、通津村の僻地に廬を結びて隱棲し、浮世を外に四面の山水を伴侶として風月の中に余生を終えた、時に寛永二年歳六十五であつた。

本書の著者は、転た英雄の覇図己んぬを憶い同情の念禁する能わず、先年「鞭棄小路」の一文を草し之を高等学校の門側に掲げたるは世の知るところである、思うて此に到れば広家も亦、時、処、会の三つの幸を逸した失意の英雄なるか、否な否な、彼れの鬱勃精神は一面干拓の大事業となつて其の子孫並に藩臣民の後代に惠存し、元治元年に及ぶまで二百六十年にわたりて歴代之を継承続行し、今や一千三百町歩の大観は、遠く瀬戸内海に斗出して万疊の滄波を啄み、日本經濟史の上に如何に偉大な輝やかしき事蹟を表顯しているかを知るのであらう、而して其の鬱勃精神は藩の空中地下に鳴動して吉川藩第三代に及び日本と言うよりも、世界に向つて其の構想と形容を誇るところの、奇勝「錦帶橋」となつて表顯したのである。

#### 四、干拓事業發起と錦帶橋創建

何んといつても吉川氏の干拓事業と錦帶橋の創設は、藩政諸施設中の二大偉蹟である、吾人は之を単なる藝術として數異に留むべきでない、人間精神の無限大なる広がり、人間精神の無極限なる撥力が、一時屈撓さることありとするも結局は何れの処にか其の表顯を求むることを証明するものとして此の二つを觀るのである、徳川の天下は三代將軍に至りていよいよ其の精華を發揮したと齊しく、吉川の天下は三代広嘉に至りて文学、産業に其の精華を開發したと共に、慶長以後七十三年にして「錦帶橋」という一大工業藝術の傑作が産れた、此の傑作を以て単なる木と石とを組立てた奇なる橋



として看賞し去る勿れ、人間精神の無極限、無限大の発露として歎異すべきである、茲に於てか始めて錦帯橋の大価値は存する。

昭和二十年の大戦終熄後、アメリカ軍の進駐が岩国市に置かれたときの事、其の進駐軍の中に一大尉——此の人はアメリカ某大学の心理学教授で応召将校として岩国に来て、此の錦帯橋を眺め、深く其の由来及び構造を聴き感嘆して曰うには、其の千古不落を用意する構造が、渾て現代の工業力学に則している、今より二百八十年前、欧羅巴はまだ十七世紀の半ばの頃であるのに、日本人がよくも此ういう工夫を成し遂げていたものだ、日本人を指して動もすれば模倣を事とする人種のようにいうが、是の橋は其の古き時代に於て日本人の独創から成立つて居る、さすれば日本人という民族は古来から優秀の人種である、此の優秀な民族が何故に今度の戦争に大敗を招いたか、深く考うべきことである、此の人種にして若し明治維新以来、其の国費の多くの部分を軍備方面に費やさず学問教育の方面に投じたならば、必ずや科学の発達に遅れを取らず大に見るべき工業的、藝術的創作を成し遂げたであろう、而も此の民族精神ある以上は後世畏るべし云々、偶々来り会した素面の一外人の眼に映じた錦帯橋彼自身は、能くも日本民族を代表して其の創造的優秀民族たるを無言の中に説明してくれたのである。

工学博士関野貞氏は去る昭和七年に、文部省国宝保存会の議員として省から岩国に特派され、錦帯橋を国宝とすべきや否につき調査した人で、本書の著者は之に応接して説明し且つ古文書や古図を提供した関係上、其の時博士の談話中に、自分も専門の学問として支那や欧米を巡歴し普ねく古建造物を視察したが、木で造つた此の橋のような物は見当らぬ、唯僅にイギリスの田舎ではこれに似たようなものが一つあつたに過ぎぬと語つたことを記憶している、前記のアメリカ某大尉の談と関野博士の権威ある視察とを綜合して考うるに、此の世界絶無の大建造物は文化文明を誇る藝術品として實に岩国



の風景画中の物にあらず、日本民族の優秀を表示する科学的傑作として現代は勿論、永く後世に伝うべきものたるを叫ぶものである。

凡そ一国国民の盛時に於ては、いろいろの方面に其の精神が表現されているが、其の中で建造物ほど力強く其の面影を示すものはない、一例を挙げれば支那六千年の歴史には隆替盛衰はあるが、杖を曳いて其の国土を訪ねて見るに偉大なる建造物の存在は特に目に着く、譬え其の四周には荒草が枯れて弔う者なきにせよ、之を建てた時代の帝王、権臣、庶民の如何に積極精神に満ちていたかを廢墟の中から憶い出すのである。著者は明治三十三年北支那匪戦乱の際に従軍した一人であるが、天津城や北京城の宏大な構築が国衰えたりとは言え、清帝国創建当時の其れを追憶して感無量に堪えなかつた、各国連合軍に攻略せられ帝臣共に蒙塵して徒に此の大城府を異国人の蹂躪に委しているけれども、此の偉大なる建造物を成した支那民族は、永久に滅びるものでない必ずや時に会して擡頭する運があると看取していた、漢土内地の興亡はあり易姓革命は打続いたにせよ外国から滅ぼされ外国に併呑さることはあるまいと思つたのが、今や四億の民衆を抱く強国として世界の中に加わり新文明を呼吸して依然存在しているではないか、遠くは秦始皇の万里の長城、秦は僅に二世にして滅亡し、其の後の王霸も幾代か姓を易えたけれども、今尙朔北を堺に蜿蜒万里の風に吹かれて其の遺趾は形を存し、当年の霸威天下を掩う盛時を物語つて居るではないか。

成程上古に於て世界制覇を唱えた希臘羅馬の大帝国は滅びて其の形も影もない、併し其れより生じた文化は多くの藝術となり文学となり哲学となり科学となり發明となり、偉人俊豪を出し又後世にも産出して世界を光被して居る、羅馬時代の幾多の建造物が今猶残つている中に、世界的名橋と言わるる橋の現存する物は西暦紀元前十八年に建築されたニーム市の元水道であつたポントガール橋である、全長九百尺、高さ百六十尺、三段に大小のアーチを並べて其の最高層を水路



が走つてゐる、又其の時代の遺物である西班牙のターグス河の谿谷に架るアルカンタラ大石橋、其れは全長六百七十尺、高さ二百十尺、六個の大小アーチを以て構成し、其の大体の規模に於ては錦帯橋と大差は無いが、其の高さに於て其の長さに於て錦帯橋は其の中位に在る、是れ皆、其の時代の隆昌を語る偉大なる精神的産物でありとすれば、錦帯橋が日本民族の創意に依り今より二百八十年前の文化草莽の時代に、早くも吉川広嘉及び其の臣僚によつて構造された事蹟は、独り岩国の誇りのみでない、日本民族不磨の名譽というも敢て溢美過褒の讃仰自唱でないということを断言するものである。

吾人は此の大なる意味に於て茲に錦帯橋史を編録するに当り、是より吉川元子爵家に伝わる古文書並に当時之に關係したる諸家の遺文を資料として、能うだけ精確に一卷を成さんと欲する。

## 第二章 錦川の流勢及び渡舟、架橋

### 一、錦川と岩国の文化

錦川は地理名の公称としては岩国川と呼ばれてゐる、其の水源を山口県周防国都濃郡の北部、陰陽分水嶺の南側、鹿野町大潮という山間部落に一勺の水として発注し、所在の谿谷を併せて鹿野町、長穂村を通過する頃は相当の水量となつて長峽に淙々の音を鼓している、其の水の向うところは徳山灣であるべきを、徳山の直背が俄に土地の隆起高くして之を遮ぎる為に、重山大嶽の間を曲折して北に向い、須金村を大迂回して玖珂郡広瀬町に達し、沿道多くの谿流的景色を画いて、一方島根広島両県界の高根村から流下する別派を、広瀬町字出合にて合流し、以下本郷、賀見畑、桑根、柱野方面より来る溪流を容れて始めて一川となり、斯くて錦帯橋下に到り瀬戸内海に朝宗する、此流長百二十四キロメートル（三十



里余）流域面積八百六十四キロメートル（八万七千百町歩）沿川の山谷は概ね花崗岩を以て成るので、高岳峻嶺の間を縫うて下る其の水色は、晴日には洋々湍々、灘に落ちては白瀬となり、淵に湛えては紺碧となり、四面の山翠と相映じて真に平和の環境を造るけれども、一朝雲興り雨暴に到ること連日に及べば、藥研堀のような峡谷に漲ぎる洪水は、瞬時に殺到して濁浪を捲き兩岸に溢れて人家を流し、掩撃の勢は錦帯橋の橋台を呑み盡さんとするものが古来珍らしき事でない。彼の尾濃や関東の平野を流るる木曾川や利根川などと川の性格に於て自ら異なるものがある。但し時々の大水の為に山岳部の肥沃の土沙を流し来る寄洲は、多年の間海浜に堆積して広面積の干潟を自然に造成し、其れが吉川氏入封と共に産米増産の好個の立地計画に用いられて、広家の軍略的経済的資源地となつたことは前に記した通りである。乃ち之を錦川が齎した厚生利用というべきであろう。三百五十年後の岩国市が之を継承して第二十世紀の後半に於ける新都市を国際間に創建する国際空港、国際貿易港たる好条件を得たるは実に天与の厚恵と言わねばなるまい。時に山の美、水の美の好風景を乱す洪水暴漲も亦福いなるかな。

錦川とは何時の代から名づけられたものか。山光錦の如き四季風景の其が清流に映ずる水の色を歌うた雅名の、いつしか岩国川という地理名を奪つてしまつたのであらうと想像せられる。其れ丈けに、錦川の春夏秋冬は洪水怒漲の日を除いては、風光明媚の観光コースで、往古に於て柿本人麿の歌謡時代、此の歌聖が石見国高津に任を受け往来せるとき、此の水系に杖を曳いたであろうことは、今尙お沿岸の村落に人麿神社の祠が所在に祀らるるによりて見ても思い出は深い。上方の都を後に山陽道を下り石見へ行くには、今の岩国市付近から錦川水系の沿岸を辿つて行くのが一番の捷路である。沿岸の岩光松景、紺碧の水、白雪の瀬、春は花に、夏は河鹿や螢、秋は紅葉、冬は雪の銀世界等、賞するに四季とりどりの色模様であるから、往古の歌人が此の風光に等閑なるわけはない。人麿が杖を立て感嘆之を久しくした場所と想わるる岸



頭や丘もある。万葉詩人の歌集「万葉集」の中には「麻里浦」の長歌がある。この麻里浦は今の岩国市の麻里布である。此の辺は吉川氏が岩国入封以前は全面海濱で、新港の山角より浦ヶ浜、水の浦、砂山、長浦から天満宮の岩山、八幡宮の白崎一帯は波打際であつた。吉川氏歴代の千拓竣功に伴い今は皆耕地になつてゐるが、其の字名の存するより思うに浜辺であつたことは疑いない。其の長歌の麻里浦は新港より門前の龍ヶ岬、尾津、四方田へかけての長汀曲浦を総称したもので

まかちぬき舟しゆかすは見れとあかぬ麻里布の浦にやとりせましを

妹が家路近くありせは見れとあかぬ麻里布の浦を見せましものを

此の風景が万葉詩人の題材となつてゐる以上は、独りわが錦川の千山萬水が雲烟過眼視せらるる筈がない。

さて此の美しい錦川も、慶長五年吉川広家の入封前は、今の錦帯橋東側から岩国山麓に添うて一派水が流れ、今一つに分派は長久寺小路付近を流れ、その本流は原状に添うて流れていたのである。要するに只今の西岩国市街地は本流の分派が二つも勝手に流れて其の間に中洲が堆積され、淨福寺の南には俗に「柳原」と呼ばれた川柳の陸地が自然のままに茂つて民家も点在していたということである。然るに入封以来、城下町の築造工事が施され、柳井、玖珂方面より商家を招致して市街を作つたのが今の街区である。即ち其の時代の河川大改修によりて本流一本にするため、川幅を拡張する必要上俗称向山（小赤壁）の下は農家の立ち並んでいたほどの陸地であつたものを潰して河川敷と為し、其れが後に水勢の為に深湛の淵となつたのは、明治時代の人の猶記憶するところである（当今は又河原に變形したが）

## 二、錦帯橋架設前の渡川交通

斯くして広家は横山に築城すると共に周辺に堤防を築き町割を定めた。町割は市区の創定で松岡安右エ門（松岡睦治君



の元祖)が之に當つた。今の川西は棚井村と言つて人家も猶稀薄を免れなかつたが、其の内町内も川西も人家は段々に増加し、士族町も各々其の分に應じて住宅が出来、横山の藩政府との往復に要する錦川渡船も上流下流に備えられ、上流の分は後の錦帶橋の処に設けられたのであつた。

渡船の外に渡橋が架けられたこともあるが、出水のために度々流失したとの説もある、其れは古記録には無い、いよいよ記録に上つてゐるのは慶長以後三十年の寛永の時代に現われている。寛永人帳という記録に「二人扶持切米八石横山渡守」というのがある。渡守に給与の事であらう。又寛永十三年卯月九日の日付で「横山渡掟<sup>おきて</sup>」というのがある。

一、水気の時分少出候共渡可<sup>レ</sup>申候、風の時も可<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>同然<sup>一</sup>候事

一、夜に入候ば毎夜無<sup>レ</sup>關渡可<sup>レ</sup>申候事

一、水道具に内々念入申べく候、損候物には時々仕置可<sup>レ</sup>申候事

一、常々の渡場より船流の時元の所へ引上させ渡可<sup>レ</sup>申候、乗捨仕り流候節は渡場へ引上させ置可<sup>レ</sup>申候事

一、臘月二十日より正月五日迄の間其外朔日、節句、于蘭盆、二日又は見物事共に数多往来の時は渡可<sup>レ</sup>申候事

一、舟に乘人多過候は達<sup>たつ</sup>て言理<sup>ことわり</sup>申をろし候て其船相応仕候程乗せ渡可<sup>レ</sup>申候、理<sup>ことわり</sup>も不<sup>レ</sup>用可<sup>レ</sup>渡申候者兎角をり不<sup>レ</sup>

申内は渡間敷候、大形に相心得多人乗せ人損し候は渡守可<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>曲事<sup>一</sup>候事

一、自然<sup>ことわり</sup>理申候に付て渡守をいため打擲など仕者有之候は則可<sup>レ</sup>致<sup>二</sup>言上<sup>一</sup>候事

右の条々手堅く可申付候旨御任せ出候間無緩可<sup>二</sup>相心得<sup>一</sup>者也

寛永十三年卯月九日

横山渡守中

宇 奎之允判



此の時分は棹にて渡つたが、後に兩岸に綱を渡し繰り舟となつたとある。

宇奈之允（家仍は宇都宮奎之允で後の錦帯橋の普請奉行、奎之允（正如）の祖父である、此の時藩行政の重臣であつた寛永十三年は慶長五年入封の時より三十六年目に当る、次で寛永十六年迄は尙渡船のままであつたと見える、同年始めて架橋の挙あり平坦の柴橋であつた、年の九月に渡守に申付けられた条々は左の如し。

覺

一、横山橋損候は不<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>多少<sub>一</sub>即時つくろい可申候事

一、雨の時渡守不<sub>レ</sub>残罷出心遣可仕候事

付、橋柱に流れかかり候物何にてもはづし可申候事

付、船筏かけ橋損候は早速相究其者に仕しをさせ可申候事

付、橋柱に舟筏一切つながせ申間敷候事

一、河狩の者など橋の下にて火焼せ申間敷候事

右之旨堅く渡守共へ可被申付候以上

寛永十六年九月十六日

福 大 河  
神 伊 源  
左 右 助

其の後十八年目の明暦三年に左の記録あるに徴するに、是迄大出水に遭い落橋流失に苦しみ再建を重ねたことあるを略ぼ察せらるるのである、恐らく明暦三年の橋普請は寛永十六年以後始めてではあるまい。



(古文書) 明曆三年八月三日横山渡橋就<sup>に</sup>被<sup>に</sup>仰付<sup>に</sup>、今晚殿様<sup>美濃守</sup>所栖御見合の為乗越へ御出被<sup>に</sup>成石切場へも被<sup>に</sup>成<sup>に</sup>御座一屋大門御戻被<sup>に</sup>成候

右渡橋出来たれども操舟も有之、正月町役にて増舟等出候、町方算用状に見へ候

又玄真公<sup>公</sup>廣嘉<sup>廣嘉</sup>御代に御法事あり、其前俄に往來の爲とて仮橋<sup>シダ</sup>を山県五左門へ被仰付、日限せはしけれども五左工

門心遣にて出来、其橋は欄干も無之、兼相なる拵へなり、其後本の橋を仰付なり(案ずるに明曆三年設けられし橋は此前)方<sup>案ずるに</sup>の出水に流落し無橋の時ありしにや

明曆三年から万治の三年、寛文となつて十二年、世は延宝元年となつた、此の時や吉川氏は広家、広正を経て第三代の藩主広嘉(玄真院)となつていた、広家の鬱勃たる不撓の精神は相伝して、広正の守成を経て広嘉の上に顯現し、文教や産業の振興に赫々の光を發揚する機會の多彩なりしこと、大に見るべきものと共に、其の尤も著しきものが「錦帶橋」の創造となつて現われた、吾人は其の時代に生れていないけれども、蓋し吉川藩君民の涵養したる過去七十余年の潛勢力が油然として表面化したる盛時の此時より壯美なるものはあるまいと、吾が胸心は躍るのである。春風秋雨、長閑なりし渡舟の光景は去つた、夏涼明月、寒冬飛雪、一幅の画に似たる柴橋の遠望は時代推移の雲に隱見して消えてしまつた、今や延宝元年の空には五龍浪を蹴つて騰り、天雨ならざるに何の虹ぞと一大偉觀の横絶を觀るに至つた。

### 第三章 吉川広嘉及び錦帶橋の創設

#### 一、岩国藩第三代の英主



抑も吉川元子爵家の始祖は三郎経義が駿河国吉川邑に住居してより家を成したのである、吉川邑は今の静岡県清水市の一部となつてゐる、経義は藤原鎌足の後で、源頼朝鎌倉に覇府を開くに当り鎌倉武士として功あり、駿河国入江庄吉河村に住し附近の地を領し、始めて吉河を氏とし後吉香又は木河と称せしも、終に吉川と改めて後代に及んだ、其の第二代吉川友兼で正治二年梶原景時が主君頼朝の死後其の権勢を失ひ鎌倉幕府より追われ誅に伏するに当り、京都に赴かんとした其の一族が駿河国を通過する時、友兼は之を道に要して撃ち景時の三男景茂を斬つた、景茂克く戦ひ友兼亦重傷を負ひ翌日俱に死した、景茂を斬つた其の一刀は今日吉川家の宝物として保存され七百五十年の久しき碧血の痕尙鮮やかなものがある、越えて第十七代広家に至り始めて岩国に移封となり茲に岩国藩主の第二世となつた、此くて相伝して吉川氏第二十代八代の吉川経幹に至つて明治維新となり藩主としての吉川氏は茲に終りを告げたのであるが、広嘉は第十九代の主として元和七年辛酉七月六日を以て生れ、寛文三年癸卯八月二十八日四十三にして封を襲ぎ、錦帯橋を架けて僅に六年の延宝七年癸未八月十六日死去、享年五十九までの十六年間祖業を承けて諸政を宏張した、襲封の期間は長しという能わざるも父広正の守成の後を承けて其の基盤の上に幾多の創造的事業を遺したことは重ねて言うまでもない。

此の時や徳川幕府は第四代家綱の時世で幕府の紀綱稍々弛むの兆候なきにしもあらずと雖も、而も大樹將軍の威力は少々の地震にて動くべくもない。天下泰平の中に民間経済は発達し文教も大に興り又武力を以て抗せんとするものはいない。広嘉は専ら藩治に力を用い、文学に於ては日本の大儒宇都宮遯庵を召還して藩の子弟を教導せしめ、明国の帰化僧独立禪師を長崎より招きて医治を乞うの外文学を問い、是よりして岩国の文教は藁々として繁茂するの端を啓き、而して著名なる画家斎藤等室も此の時に現われ、後代群出の岩陽造形藝術の振鐸を爲した。又経済策としては海瀉干拓の業を奨勵し、柳井、新庄、中津の各村に墾田に伴う水利の業を興して堀川を掘鑿し、又北河内村の二鹿銅山の経営等、立地的に農



山村の殖産を促進し、物資を海外に輸出して外貨獲得に備うるに大阪中の島に藏屋敷を設置するなど、倉庫為に頗る富むに至つた。

## 二、吉川広嘉の創造的精神

斯の如き積極精神に満つる広嘉並に其の潑刺下に立つ臣僚藩民に於て、出水に遭うて屢々落失の運命に置かるる渡橋を、何条いつまでも看過すべき謂れはない。其の度毎に藩の費用は無駄に流されるのであるから、千古不落の橋の名案は無いものかと、つねずね思い苦しむ胸中の広嘉は一念發起して工夫を凝らした。俗説に伝うる所によれば、広嘉一日「かき餅」を焼いて食わんとし、之を鉄網の上に載せて火で炙ぶると、其れが心なく膨れて弓の如く反り上る。火箸で抑えろが又反り上る。此くすること數次、矢張り反りあがるので之を四つ五つ並べて見た。茲に於てか刎ね橋の原理を思いつき、吾れ架橋の法を得たと喜んだというのである。事實の有無は別とするも、凡そ大發明家の窮理發端は平凡なところから神秘を發見するものである。ニュートンが林檎の地に落つるを、ゆくりなく眺めて地球の引力を發見し、ワットが鉄瓶の蓋の噴きあがるのを偶然見て、蒸氣力の偉なるを覺り其れが蒸汽船や蒸氣機械に應用されて世界文明の機端となつたことなど、思い到れば広嘉のかき餅の世説も馬鹿にならない確説かも知れぬ。又一説には明国の帰化僧獨立が広嘉と文学を談じ藥草を談じ種痘術を談じ、閑話休題の合間々々に、<sup>おのず</sup>自から柴橋改良論も話題に上り、漢土には古來在るところのアーチ型の無脚橋梁の話も出て、広嘉の慾求にヒントを与えたこと少なからずと伝えられている。成程支那にはアーチ型の無脚の其れはあつて文人画の中に親しく見るところであるから、此の伝説亦野人の虚誕でないと思う根拠もある。いずれにせよ広嘉が不落の橋梁を架するに執心の深かりしことは疑うべからざることである。しかし乍ら獨立禪師から大なる暗示を受け強い衝動を感じたとするも、支那の其れは石橋又は漆喰様のものを凝固して構造したもので而も溪谷などの短距離



に架る単橋であるから、錦川のような川幅の長い区間に架橋するには、簡単な石橋如き構築にて之を果し得ないことは自明の理である。よしヒントは独立から受けたにせよ、此の如き石を得るには難く而も長橋となるから石や漆喰様のものでは之を支ゆることは出来ない。古代羅馬や西班牙にはキリスト誕生以前から大石橋の寧ろ錦帯橋より長きものがあり、今尙現存しているが、此の如き技術は延宝時代前後に於て日本に伝わり居るべくもない。されば従来の木材を主とする架橋の外はないが、さて如何にして之を無脚ならしむるかが広嘉に取りては大問題であつたであらう。

前記の渡船場の掟や柴橋架設後の覺書揭示にあるように、洪水の時は忽ち激流となつて奥地より多くの流失物が橋脚に引きかかり水勢之に加わりて橋脚を奪い去り落失の因を成すから、橋脚無し橋を造ることは必須条件である。其の木造に依る橋梁の構造は果して広嘉の獨創であるか、又は日本の宮殿、樓閣、神社、仏寺の建築が古來造形藝術に合理的工学物として既存する以上、之に依りて或る教指を与えられたのであるか、但しは又何処の国にか橋梁術の範とすべきがあつたのであるか、歴史の故實は後代の人を引立てる。是れ文化文明進歩の連続階梯である。嘗て本書の著者は昔の絵圖などで、溪谷に懸つた単橋無脚の稍々アーチ型になつてゐる谷川橋を見たことがある。これは唯だ絵画的に芸術化したものか、或は山国部落には、現実的に古來存在したものであるか、釣橋は現存する実物の上を渡つたことはあるけれども、釣橋にあらずして兩岸から其の両端下を岸に接して疊み上げ架け渡した実物は甲斐国猿橋の外には見たことがない。しかし山嶽地帯の奥地に於て断崖絶壁の間を往来する部落住民には、自から無脚にして不落の渡橋の發生するは有り得べきことと想うから、飛騨国とか信濃国とか本洲の脊髓骨地帯の峽谷には往古より現存したと推想することは強ち一片の絵画的觀賞に止らぬであらう。されば出水落橋に苦しむ優秀の頭腦の持主、吉川広嘉にしても、亦其の輔佐役たる建築師の児玉九郎右衛門にしても、其の模範を求むる眼が、此の山岳地帯の無脚単橋に注がれないということはないと、筆者は想定



する。茲に於てか筆者は本邦の古建築物の先蹤を思ふと共に、橋に就ても、後の日本三奇橋の名を馳せたる其一の、甲斐國猿橋町所在の「猿橋」の構造に想到せざるを得ない。

### 三、甲斐の猿橋と吉川広嘉並に藩臣兒玉九郎右衛門

猿橋は山梨県北都留郡猿橋町の中央を貫ぬく溪谷に架る無脚の橋である。何時の世からか錦帶橋、猿橋及び越中堺川橋（吊り橋）は日本三橋として人口に膾炙されている。其の猿橋が何故に錦帶橋の構造に交渉を有するか、勿論錦帶橋は長さ百二十五間の彎曲せる長橋、猿橋は僅か二十間余りに過ぎぬ短距離の平橋で、其の規模に於て構造に於て雲泥の相違があるばかりか、岩国と猿橋町とは縁の遠い山河数百里の天涯地角を隔てて居る、元龜天正の戦國時代に於て武田信玄の後継者武田勝頼は、猿橋溪谷に近い上流の天目山に於て敗死して、英雄信玄の祭祀を絶つに至つた悲話は、永久に此の橋下の紺碧に流れている、本書の著者は明治二十七八年の日清戦役の時、重砲兵の青年兵士として大砲十余門を曳いて此の橋上を徒渉した経験があり、其の後一、二度通過したこともあるので、其の橋上橋下の構造風景は今猶眼前に髣髴してゐる、随つて錦帶橋と、猿橋との構造に於て一脈の氣息が通うてゐるやうに想われてならない、吉川家の古文書によると、広嘉は在世中、江戸へ四、五回往復している、其の旅路を時に甲州街道に依つたこともある、当時西国から江戸に上り下りするには東海道を経るが通常であるが、又東山道を経由してもいた、源平時代に於ても京都から奥羽地方へ行くには概ね近江美濃から東山道を経て関東平野に出で上州野州より陸羽の行路を過ぎた、源義経が京都の商人に隨行して奥州の藤原秀衡に身を托した行程は此の道であつた、されば江戸時代に於て西国の大名や旅人の甲州街道を経たるも当然であろう、広嘉が此の街道を通過したとすれば、此の猿橋が既に延宝元年より百四、五十年の昔室町時代（足利幕府）に、架設されていたのであるから、其の奇觀に目を注いだことは、長の旅路の觀賞としても有り得べきことである。



邈漠として知るべからざる天地創造の昔、天斧の奇工は断然此の大地に一大割裂を加えて猿橋の深谷を開いた、重山複嶺から下る水は淙々として此の峡谷に集流した、断崖千尺、峭壁は堅板のように懸屏となり長風深湛を掠めて遠く去るところを知らずである、兩岸の間は一躍達し得んと思わるる程の短いものであるが、一步を誤れば顛落して五大四瀝忽ち粉碎されんのみ、谷深くして固より橋脚を用ゆべくもない、其れで無脚の工夫となつて之を支ゆるに兩岸壁から各々疊み上げの木組みを階段式に施して平坦橋を延長し、全重量を保たしむる工夫が施されてある、丁度、錦帶橋の反り橋刎ね起しが橋台に接して居る処に酷似している。

延宝元年錦帶橋創造の時、御作事組の士族児玉九郎右衛門が棟梁として之を経営したのであるが、此の御作事組とは、大工を業とする士族の階級を指すもので、此の児玉が錦帶橋を建築するに先だちて「諸国見聞」という事が文書に誌されてある、諸国見聞とあるだけで何れの国に何を見聞したかの詳細に至つては録するものはないけれども、寛文元年一度は広嘉に隨行して上方へ上つたことは、古文書に残つて居る、此の時大坂から広嘉に別れているが行方は不明、広嘉帰藩の折りも道伴れとなりていない、多分此の時日間、彼れは広嘉の指示により「諸国見聞」に漫遊して架橋の先例を究め甲州猿橋方面にも歩を枉げて、その岩壁から疊み上げてある実物を見て之に学び、刎ね返しの彎曲橋に応用したのではないかと信ぜらるる理由もある。

九郎右工門は又寛文十二年（錦帶橋創設の前年）に広嘉の命を受け長崎在寓の独立を訪問し、滞在一カ月に及んでいる独立に就てアーチ形架橋の研究も其の用命の一つであつたと想像せられる。単に広嘉の病状報告や藥取りに行つたのなら一カ月滞在は余りに長いのみか、其の方面の用命のみならば典医が居る、殊に長崎は其の頃唯一の開港場で、支那人やオランダ人ポルトガル人など来往し西洋の文明も入つていたから、橋梁學に於ても九郎右衛門の見聞を高くし、錦帶橋の構



遺に影響の少なからざりしことは、略ぼ想像せらるるのである、惜むらくは九郎右衛門の子孫には何んら古文書が伝つていない、今日児玉家の子孫は岩国市門前の児王安積君であり又其の分家は県下防府市在住の児玉ハツヲ嬢で家柄は代々御作事組（建築業）或は御細工組の士族に属していたから、以て其の子孫たるを想定する理由はあるが、家に文書の存するものなく、只だ祖先に九郎右衛門の在りしこと丈けが伝えらるるに過ぎぬから、其の建造の由つて来る史実並に当初の設計に就て之を精確に記すことの出来ないのは甚だ遺憾である。但し吉川家の古文書によりて創建当時の橋梁築造の経過を概観するに児玉九郎右衛門が広嘉の片腕たる業績は以て推定せらるべきである。

広嘉の江戸出府に関する記録は吉川家の古文書を渉獵して、能く其の精核を究めている財団法人吉川報効会の桂芳樹君の筆にて明かなように、広嘉が初めて江戸に行つたのは寛永元年八月（四歳）人質として数年間滞在し、次で慶安二年三月（二十九歳）父広正の参観に隨行し、翌三年正月帰国し、承応元年四月病氣治療の爲京都に上り、同二年四月（三十三歳）京都から江戸へ赴き、將軍家綱に謁して通称を監物と改め、同十二月江戸を立ち京都を経て翌春二月帰国、第四回は万治三年三月（四十歳）江戸へ参府して七月江戸を立ち木曾地を経て京都に立寄り八月帰国、寛文三年父広正隠居し広嘉襲封し、延宝四年十月息長熊を隨えて江戸参観、翌五年四月帰国した、第四回江戸行の帰路を木曾地に取つたという事は江戸から甲州を通り信濃国伊那方面を通過して尾張美濃を経て京都に立寄つたコースを明かに示すものである、吾人が其の途上に於て甲斐国猿橋の山里を通過する際、奇工の猿橋を觀て其の架設法を腦中に蓄えたというのは強ち想像のみであるまい。

#### 四、猿橋の故実と錦帶橋

上記のような想定に依つて筆者は猿橋の故実につき興味を抱き、書面を送りて地元の猿橋町長及び山梨県土木部に照会



し、其の由緒や構造の古文書あらば贈与を乞うた。両者よりは何の返事もなかつたが、猿橋町在住の山梨県文化委員仁科義比古氏より特信に接し、此の橋の故実を知るを得て吉川広嘉及び児玉九郎右衛門の構想に少なからぬ影響あるを知つたから茲に其の全文を留めておく。(文中に貴橋とあるは錦帯橋、当橋は猿橋)

## (前略)

さて貴橋と当橋との構築的並びに始原的交渉に就ての考証すべき御尋の数々につき小生の管見を少しく申上ます、当橋としては創建時代の文献としては信用すべきものではありません。

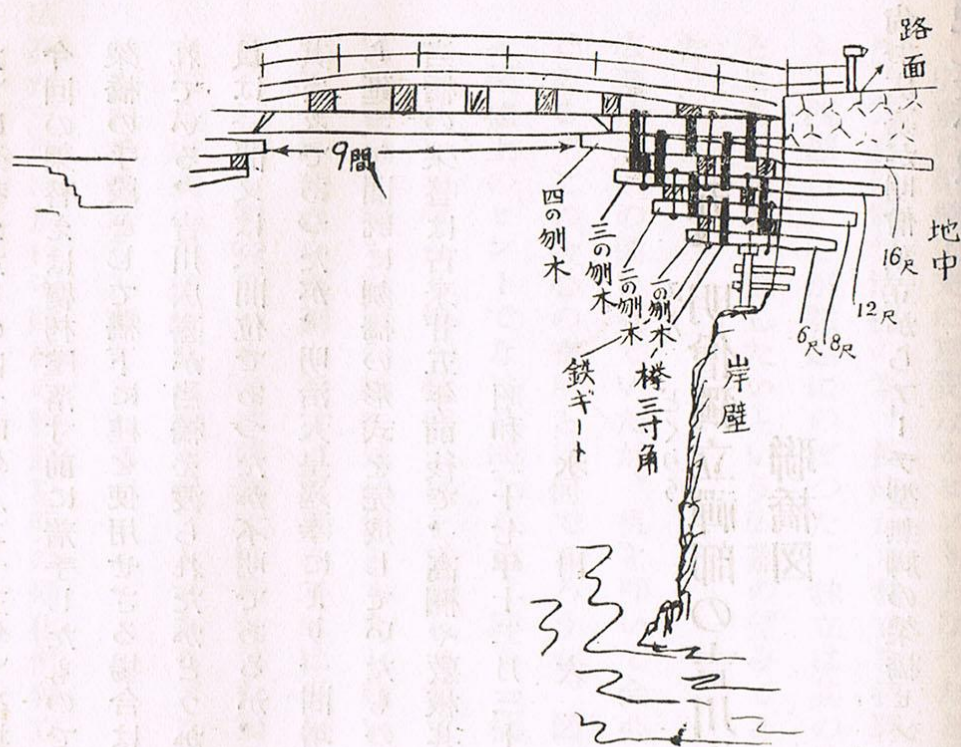
望護院道興が手記——文明十九年二月(長享元年足利義尚代四百六十三、四年前)廻国雜記のなかに「千尋の谷に三十余尋の橋を渡し」云々、とあるだけでも幅も高さも無之、其の後大永四年、享祿三年、天文二年等武田と北条との合戦が此の橋を中心として度々なされたが天文二年には戦火で焼落、七年後の天文九年に再興したこともある、従来の記載文献として最も確實なものとしては宝永三年(二四七年前)物徂徠が入国された当時手記された「峡中紀行」の中に

……相語<sup>ル</sup>是<sup>レ</sup>猿王ノ所<sup>レ</sup>架、長<sup>サ</sup>十一丈、達<sup>レ</sup>水水際三十三尋、而水深亦三十三尋……橋下無<sup>ニ</sup>一柱<sup>一</sup>、從<sup>ニ</sup>兩岸<sup>一</sup>累<sup>ニ</sup>鉅材<sup>一</sup>架起、上者必出、下者外尺許、愈<sup>ヨ</sup>累<sup>ネ</sup>愈<sup>ヨ</sup>出<sup>デ</sup>、以得<sup>ニ</sup>相近<sup>一</sup>而橋<sup>ト</sup>之。誠<sup>ニ</sup>神造也……

次に甲斐国志(文化十二年国守松平定能監修三百卷)に因ると「長十七間、巾一丈一尺、一ノ刎木六間四尺、二ノ刎木七間二尺、三ノ刎木七間二尺、三ノ刎木八間、四ノ刎木八間四尺、地に入ること又同じ、桁梁は九間四尺、次梁六間、橋上より水際まで拾七間弱、世に之を三十三尋と云う大概を云うなり」云々

とある通り宝永三年の峡中紀行には数本の刎木の存在を確認出来、文化十二年の甲斐国志には前記の通り刎木の寸法





や使用法も明記されている。

そこで貴橋と当橋との物理学的考案に取入る訳ですが之れに就ては「土木技術」第六卷第十一号（昭和二十六年一月号）に日大教授の成瀬氏が「錦帯橋雜記」と題する論文があります、既に御覧の事と存じますが、当橋の刎木と貴橋の拱肋とは同一な力学的根拠のものであることを明かにされている（筆者曰く、成瀬氏の右の記事ある雑誌は錦帯橋再建工事監督者佐藤博士の寄贈に依り既に本書に引用しておいた）

当橋の刎木は三本並行に四層（兩岸共）であるが、貴橋は両方から十一本の行桁材が次から次とツギ合せ差出され、中央に於て大棟小棟でべつけられアーチの完成をなしているのであるが、当橋では兩岸から突出された刎木の最上層の各先端の間隔は、僅かに九間弱でそれに桁を架けて板を敷列べたもので、中央に於て反りが約四尺ある、貴橋の隔石と称するものが当橋では兩岸の岩壁と云う訳で、橋上に重圧が加われば兩岸を圧迫する力と、谷間を圧迫する力（墜落力）とに分力する道理から橋は安全な位置におかれることになります。



国志には、刎木の地中と外出部とは等分とあるが、明治卅三年九月（約五十年前、十年前に通行は禁止せられていた）に架替えたものは一昨年（二十五年）発掘により上記の様な事実を確認しました。

今回の架替えは腐朽墜落寸前に着手したものです。

架橋の手段として橋下に柱を使用せざる場合は当橋の如く刎木を使ゆるものと吊橋より以外には皆無であると云われている、吉川広嘉が当橋を渡られたかどうかは小生の管見では当地方には文献はありません。既に室町時代には幅員は一間又は二間位であつたか不明であるが、文化十年頃には一丈一尺と明記がある。思うに明治十三年六月までは其まゝであつたが、明治天皇巡幸により一間増して約三間とした明記がある。徂徠入国時に刎木を使用していた事から延宝年間既に刎橋の形式を完成していたものと推考しても危険はないと思考する次第です。当橋の架替は古来廿五年前後で、高欄や敷板其の他の小部分は十年前後に修理している（以下略）

昭和二十七年十二月三十日夜十時記

仁 科 生

永 田 大 兄

## 五、みんなどくりう明僧獨立禪師の吉川広嘉に示した支那西湖の

### 聯橋図

尙お広嘉が明僧独立からアーチ型無脚の架橋ヒントを得たという伝説について吉川報効会の桂君は極めて興味ある史話を記している。



広嘉の架橋工夫に重要なヒントとなつたと考えられるものが今一つある。それは西湖志の図である。寛文四年四月、広嘉は病氣治療の為、長崎から独立を招聘した。或る日御殿に伺候した独立が広嘉と打解けて対談している内にふと西湖のことが話題にのぼつた。独立は其の景色のことを話した序に、近頃西湖志を手に入れたことをも物語つたところ、是非一覧したいという広嘉の望みである。飛脚が長崎に飛び受寄せられた西湖志は、広嘉の前に展げられた。

広嘉は志中の図を見ていたが、机を叩いて会心の奇所を得たと言つて、大変な喜び様だつたという。六月上旬のことである。この会心の奇所とは何であろうか。図を開けば、蘇堤の堤橋交互して湖中を渡過しているのを見る。これこそ架橋上のヒントでなければならぬ。即ち一橋に数個の橋脚を付属させるという通常の橋梁の概念を破つて、数個の鳴を築いて鳴から鳴へ数個の橋を併列して渡すという着想の発見である。

猿橋式の拱橋も錦川の幅には如何ともなし難いが、河中に数個の鳴を築けば、その応用は可能になる。

まことに独立の西湖の話は、広嘉の耳には天来の声と響き、西湖の図は彼の目には架橋の秘伝書と映つたのである。しかも興味深いものは西湖志に描かれた橋も拱橋であることであり、更に錦帯橋が支那式の石造拱橋を選ばずに日本式の木造拱橋に進んだことである。この拱橋の採用と橋脚より橋台への概念の転換とが、広嘉に負うところのものであらうと考えられる。

広嘉が支那に於ける跨橋の物語を明の帰化僧独立禪師から聞いた外に耳にする機会ありしと想像せらるるは、承応三年京都にて養生する際、独立の師事した日本に於ける黄檗宗の開山帰化僧隠元和尚にも親炙し、其の時錦帯橋創建の棟梁児玉九郎右衛門も隨行していることは、同じく隠元の架橋談話を傍聴する機会があつたのではあるまいか。九郎右衛門が架



橋について其の後「諸方見聞」したことに事実相違ないのは、元祿十一年即ち延宝元年より二十六年後に出来た洞泉寺住持の「根笠紀行」律詩十余首に、註解を施した高弟轍外の文中にも「児玉与八郎九郎右衛門の別名先君の命を受けて之を創む。諸方見聞せるもの、魯般之巧も恐らく此れに過ぎずと謂うと云う」とあり、創建以後二十六年は余り久しき歲月ではない。且つ九郎右衛門は元祿五年まで生存していたから、一元和尚も轍外も創建頃には眼前に其の工事を見ていたのみか、此の註解の年は九郎右衛門死後僅かに六年の隔りに過ぎぬのであるから、一元和尚と轍外には猶耳新しい評判で、他の古記録にも別存する九郎右衛門の諸国見聞が、木造橋アーチ型を工夫するに於て、随分役立つたことは事実として承認すべきである。広嘉が一念発記した時に九郎右衛門を召出して其の意を告げ着手を命じたのは蓋し偶然ならずである（轍外の註解は卷尾の付録、詩文の中に採録してある。参照せられよ）

（註）魯般之巧とは細工又は工作の優秀巧妙を絶讃すること、孟子の離婁上篇に「離婁之明、公輸子之巧も規矩を以てせざれば方員を成す能はず」というに註して「公輸子名は班、魯の巧人なり」とあつて、淮南子にも「楚、宋を攻んと欲す、墨子聞て之を悼む楚王に見えて曰、臣、大王の必ず義を傷り而も宋を得ざるを見ると、王の曰、公輸は天下の巧士、雲梯の械を作為し、設けて以て宋を攻めば曷なんすれど為取らざらんと、墨子曰、公輸般をして設けて以て攻めしむれば臣請う之を守らんと、是に於て公輸般宋を攻むるの械を設く、墨子宋を守るの備を設く、九たび攻めて墨子九たび之を却く、入る能はず、乃ち兵を偃せて攻めず、公輸は魯般也」とある。尙淮南子に「魯般木を以て鳶を為りて之を飛ばす」とある。轍外が其の魯般も恐らく九郎右衛門の技に及ばずというは、比喻なりと雖も、当時児玉九郎右衛門貞矩の工名が人口に膾々たりしを察知すべきである。

さて渡船又は柴橋土橋の平坦橋で七十余年の長の月日を渡川していた吉川藩も、之を根本的に堅固化する橋梁につき吉川広嘉の目算はあらゆる研究によりて落着し、之に伴う費用の成算も立つたので、いよいよ歴史的の偉業に着手したので